

## あ る 回 想

お茶の水女子大学教授  
三 木 紀 人

この4月24日の夜、文教育学部の第一会議室で「日本言語文化専攻発足記念会」が行われた。本専攻のいわゆる基幹講座に属するひとりとして、私もそれなりの感慨を味わいつつ、この夜に至る日々を思い出していた。

その思い出の発端は、私個人にとっては7年前、昭和59年5月23日午後にさかのぼる。いましがた日記によってその具体的な日付をたしかめてみて、それが実感以上に遠い昔であることに、びっくりしている。

当日、比較的あっけなく終わった国文学科会議のあと、例によって雑談となり、昨今のさまざまな情勢に話題が及んだ。例えば、中曽根政権下の公務員の立場のきびしさ、特に年金に関する暗い見通しなどのことが出て気がめいったものであるが、話の展開の中で、市川教授が新聞の切抜きを示され、文部省が日本語教育に本腰を入れるようだという情報を披露して下さった。その分野に当時まったく不案内であった私は、この時、国文の新米の主任として座にあったが、今後の自分の責務にこのお話がどのように深くかかわっていくか、あまり自覚していなかったような気がする。しかし、この場合の印象は鮮やかに残っているのだから、意識しないところで何らかの予感を持ったのかもしれない。

そして、翌年の概算要求の時期、国文学科は日本語教育基礎コースの開設にとりくむことになる。市川教授のお話のほぼ一年後の5月22、3日、この問題および内外の諸事情にくわしい堤・浅井教授の研究室を歴訪しておふたりの展望などをうかがって、それを機に、主任としてこの件について何をなすべきか、模索の日々が始まった。

それから十か月後、年度が終わって主任の役が解けるまで、私自身はただたどしいままであって、それは以後も同様である。つまり、今回の言語文化専攻の実現まで、推進力となった方々のまわりでうろうろしていたにすぎないのであるが、一連の経過にある程度立ち会うことができた。その立場による思い出が、おりにふれてよみがえる。

古今東西の歴史の中で、ある物事が必要かつ不可避になると、その実現に向けて偶然とは思われぬ偶発事がつづいたり、状況の中に磁場のようなものが形成されて、欠かせぬ人材が各方面から集まってきたりすることがある。そのことを知った時、人は超越者の存在を感じざるをえないのであるが、発足記念会までの歳月にもそのような気配があるのではないか。会の席上、酔いも手伝って、過去の大小さまざまな事を少なからず劇的なものとしてふりかえりながら、私はそのように思うに至った。